

さざなみ 国語教室

さざなみ国語教室

第520号 2025年 7月25日

発行者代表 吉 永 幸 司

連絡先 大津市柳川2-11-5

TEL 077-522-1008

発行所 滋賀児童文化協会

NPO 現代の教育問題研究所

こころをほどこし、

回復をつなぐ「言葉」

増田 史

私は精神科医として働いております。精神科の診察は、主に言葉を介して行われます。その方がどのような経験に傷つき、今の状況をどうとらえているのか、などに耳を傾けます。

言葉は発せられると、そこに意味を帯びます。患者さんは、言葉で傷ついてこられた一方、言葉により回復されることも多いものです。単なる薬物療法だけではなく、対話が大切な役割を持ちます。

一方、言葉は「単なる音」という視点が大切になることもあります。他の人から何を言われても、それを「意味」として解釈してしまふのは自分自身の脳にすぎません。

ん。まっさらな状態では、それは単なる音でしかありません。意味を乗せるも乗せないも、そして意味それ自体も、自分自身で選べるということを知っておくと、他者からのネガティブな影響を最小限に抑えることが出来るかもしれません。

「生きづらさをひも解く 私たちの精神疾患」という、当事者の方々が執筆した教科書があります。その中で「幻聴」や「妄想」という言葉のおかしさが出てきます。当事者にとっては現実である体験が、どうして「幻」や「妄」と名付けられているのか。医療者のおごりが全くないとは言えません。

これまでたくさん傷ついてきた患者さんを、これ以上医療者が言葉や権威で傷つけないことは、とても大切なことです。この考え方は、医療の場における傷つき体験に配慮するケア（トラウマ・インフォームド・ケア…etc）として、世界中に広まりつつあります。病院内の注意喚起を柔らかい表現に変更したり、ホームページの文面を患者さんを尊重したものに直したりする動きがあります。

なお近年は、各国の精神疾患に関するガイドラインでも「精神病患者」ではなく「精神疾患を持つ人」という表現が推奨されています。精神疾患は、その人のごく一部の特徴にすぎないからです。

また、患者さんを取り巻くスタッフや支援者も傷つきやすい環境にあります。互いにねぎらいの声をかけ合ったり、自分自身に温かい言葉をかけたりする（セルフ・コンパッション）ことも、支援者自身のセルフケアとして重要です。

安全で安心できる環境を形作る基礎となるものが、そこで飛び交っている言葉だと感じています。患者さんのリカバリーの助けになるよう、ひとつひとつの言葉を、丁寧に紡いでいきたいと思えます。

（滋賀医科大学 精神医学講座 助教・主に児童・思春期の方を診察しています）

さざなみ

▼教科書の内容を絞り込む方針が中央教育審議会特別部会で「教科書のスリム化」議論されている。次期指導要領がスタートする2030年度以降に適用するとのこと。教科書について

が、2018年に文科省は「置き勉」を認め、2026年には学習者用デジタル教科書を制度化する法律施行等、なにかと話題になる▼教科書の改訂ごとに情報が盛り込まれ、結果としてページ数が増えてきた。国語科6年教科書は、全体が293ページ。巻末には43ページにわたる付録がある（光村図書）用語やコラム、学習の手引も含め至れり尽くせりとなっている。しかし、国語科では、教科書の分量が増えたから授業時数が増えるという訳ではない。むしろ新しい教科書設けるたびに時間数を減らすというようになつて今日に至っている▼「ゆとり教育」の批判を受けて2019年の教科書改訂にあたって「話すこと・聞くこと」の分量が多くなり指導に知恵を絞らねば記憶がある。授業では文章化した話し合い活動の例示を読解することを目指したと思ひ込む実践を目にする。こともあった。また、いわゆる教科書の「赤刷り」バージョンの全て教え答え合わせのような授業もある▼子供にとって、教科書はどのように映っているのだろうか。やたらと多い「考えよう・伝え合おう・見つけよう・問いをもとめよう」等々▼教科書の子供の視線でスリム化しよう。大胆な見直しを期待する（吉永幸司）

登場人物に注目して 『おおきなかぶ』を読む

川部 長人

一年生の子どもたちと、『おおきなかぶ』の学習を行った。一時間目に音読をした時から「うんとこしょ、どっこいしょ」や「まだまだかぶはぬけません。」などを楽しんで読んでいた姿があり、単元の終盤では、音読劇を行いたいと思っている。今回の実践では、『おおきなかぶ』に出てくる登場人物を中心に、お話のおもしろさに気付かせたいという教師の願いがあった。

一年生から国語の学習用語を身に付けてほしいという思いから「おおきなかぶに出てくる登場人物はだれかな?」と聞いてみた。子どもたちからは「おじいさん」や「おばあさん」、「犬」などが出てくる中、Aさんが「おおきなかぶ」と発言した。「おおきなかぶは登場人物ではないんじゃない?」と発言する子もあり、「おおきなかぶは登場人物か?」をみんな考えてみることにした。初めは、登場人物だと思いが三人、思わないが二十人であった。まず、登場人物だと思おう方の意見を聞いてみると「お話にでてきているから」や「題名がおおきなかぶだから」などの意見が出てきた。思わない方の意見を聞いてみると「おおきなかぶは動いてないから」や「登場人物っていうよりは、出て

くるものみたいな感じかな」というような意見が出てきた。どの子の発言も、一年生ながら自分たちでよく考えた発言だなと感じた。その後、言葉の定義として「登場人物はお話に出てくる、人のように話したり動いたりする人物」ということを確認するとともに、「Aさんのおかげで、みんなの学習がさらに深まりましたね」という話をした。

その後、「登場人物が出てくる順番は、おじいさんからじゃないといけな?」反対のねずみからじゃダメなのかな?と聞いてみた。この順番じゃないとダメが十二人、だれからでもいいが十一人であった。この順番じゃないとダメと言いつけるBさんから、「おじいさんからねずみまで、力が弱い順番に出てきていると思う。最後の一番力が弱いねずみさんの力がかぶが抜けたところがおもしろい」と話し、みんな納得の様子であった。他にもCさんは一番初めの挿絵に注目して「種をまいているおじいさんが、大きく育てていう、おまじないをかけていると思う。おじいさんががんばって育ててきたから、登場人物の順番はおじいさんからじゃないとダメ」という発言に対して、周りにいる子たちから「たしかに!」という言葉があふれていた。登場人物の出でくる順番によって、お話のおもしろさが変わるということに、どの子も気づいていたようであった。

(湖南市立菩提寺小学校)

『子どもたちのつながり』

井上 滉斗

二年一組の子どもたちと出会って、約三か月。早いもので、もう一学期が終わろうとしている。今回は、一学期に私が見た子どもたちのステキな姿をいくつか紹介したい。

【①漢字学習での一コマ】

先…今日は『夏』という漢字です。
A…私の名前の漢字や!
B…え、Cちゃんの名前にも入ってなかった?
D…私の『な』もこの『夏』!

先…『夏』の漢字が名前に入る人は、3人もいるんですね。では、みんなに、ミニ先生として書き方のポイントを教えてくれませんか?
A…一画目は、長めに書くんですよ。
3人がそれぞれ説明し

この後、子どもたちは友だちが教えてくれた名前の漢字を丁寧に練習していた。また、後日行ったミニテストでも、『夏』の漢字はほとんどの子を書くことができていた。

【②生活科での一コマ】

E…きゅうりの観察どんなこと書いた?
F…えっと…(プリントを見せる)
E…実は『中ぐらいの大きさ』ってどのくらいの大きさってこと?

F…このくらい(手で長さを測る。)
E…じゃあ、「ペンの長さぐらい」って言い方のほうがよくない?
F…たしかに…。そうする!

それから、E児とF児は野さいのかんさつをするたびに、他のものの長さ例える書き方をしていた。

【③時計の学習での一コマ】

G…先生、これでいいですか。
先…答えがちがいます。この問題は(2度目の説明)。今確かめたことを使って、もう一度考えてください。
G…うん…(不安そうに自席にもどる。)

3分後
G…先生、これでいいですか。
先…花丸です!

G…さっき先生が教えてくれた時はまだわからなかったけど、その後、Hさんが教えてくれたからできた。
先…Hさんにありがとうですね。

子どもたち同士で説明し合った方が、スムーズに伝わる場面が多々あります。私たち大人としては少し悔しい気もしますが、これも事実ですね。

子どもたちの豊かなつながりからは、素晴らしい瞬間がたくさん生まれている。

(豊郷町立日栄小学校)

スイミーに寄り添って
思いを書く

岡嶋 大輔

「スイミー」(光村図書二年上)を扱った学習。場面ごとに、「その場面の題名」と「スイミーの思い」をワークシートに書き込み、次の時間にそれらを一覧にしたものをともに「いいな」と思うものを交流していくという展開で学習を進めた。

お話のはじめ、スイミーが仲間と楽しく暮らしている場面。子どもが考えた題名の中に「ななかまがいったいだったスイミー」「じんせいであわせたスイミー」「どちらの題名も、お話を最後まで通して読み、全体の内容を把握することで書けるものである。また、過去形で書かれていることで、場面と場面のつながりを意識して題名を考えていることも分かる。これらの題名を「いいな」と思った子が、その理由を「これから悪いことが起こりそうなのが分かるから。」「スイミーが、幸せだったなあ」と振り返っている感じがするから。」といったように発表した。前述したその題名の良さを感じて自分の言葉で説明する子らに感心させられた。

スイミーが海の素晴らしいものに出会う場面では、「ななかまにもう一かい会って、このすばらしい海を見せたかった。」というスイ

ミーの思いを「いいな」と思った子が多かった。そのスイミーの思いに対する感想には次のようなものがあった。「スイミーは、海のことを面白いと思っただけだと思っていたけど、いなくなった兄弟の魚のことを思い出していたのがなるほどと思った。」「いなくなった仲間たちに素晴らしい海を見せたかったと思ったから、後であれだけ一生懸命にスイミーは考えたのだと思った。」等々。本文には、スイミーについては『元気をとりもどした。』としか書かれていないが、前後の場面と結び付けながらスイミーの思いに寄り添って読んでいることが分かる。

スイミーがうんと考えた場面では、「このななかまたちをなんとかまもりたい。」といったスイミーの思いを書いた子が数名いた。仲間を失った後悔や新しい仲間に出会えた喜び、仲間が素晴らしいものを見せたいといった、これまでの学習の中で出されたスイミーの思いを言い表しているからである。このスイミーの思いを「いいな」と思った子がたくさんいた。学習の展開としてはシンプルなものであったが、それ故に普段はワークシートに何かを書くということができにくい子も、「題名」と「思い」をじつと考え、「先生、いいの考えた。」と見せに来ることもあった。自分にはなかった考えに出会い、その考えも「いいな」と思える場面が多かった学習となった。

(野洲市立北野小学校)

はじめての説明文の学習
「どうやってみる」

まもるかな(一年生)

山田 定子

はじめて学習する説明文である。本文を読んで、知らなかったことが分かったという楽しさを感じさせたいと考えた。また、読んで分かった内容や考えた感想を友だちに話したり書いたりすること、友だちと伝え合う活動を設定した。自分の感想や考えを自分の言葉で伝え合うことで、より理解を深めていけると考えた。

動物が敵からどうやって身を守るのか、クイズのような形で三種類の動物の特徴や生態が分かりやすく書かれており、ふだんの様子と敵から身を守る様子を、絵を手がかりにして、説明の内容や順序を正しく読み取るという説明文の読みの基本を育てたい。

① 題名からどんな話を予想させ興味を持たせる。

② 本文を読んで、気に入った動物について、絵と文でまとめる。

③ 学習の目あて、計画を立てる。である。この活動により、話の大体をつかみ、学習の目あてをつかむことができた。

毎時間の読みの学習は、次のようである。

① 本時学習するところを音読する。

② 視写する。

③ 小見出しをつける。

小見出しをつけることで、話の大体をつかませる。

④ 挿絵を参考に、身の守り方を読み取る。

ふだんの様子・身を守る様子・問いの文・答え

⑤ 問いについて、本文の言葉を使いながらまとめる。

この学習をくり返していくことで、叙述に即して内容を正しく読み取ることができた。

最後に、学習のまとめとして、自分のお気に入りの動物について感想をまとめ、交流した。

また、他の動物達は、どうなっているのかと興味をもつ子が出てきた。そこで、図鑑や他の絵本などを参考に、本文の書き方をまねながらお話を作り交流した。

よく知っているうさぎ、だんごむし、ふぐ、はちなどや、図鑑などで調べたはりねずみ、えりまきとかげ、クマノミなど、たくさん動物についてまとめることができた。友だちのお話も読み合いながら、楽しく学習を進めることができた。学習したワークシートなどを持ち帰り、保護者からも

○どのような生きかたをまもるのか、ノートにしっかりかいたね。

○へびやうさぎなどのことも、かえがえることができてすごいね。

○わからないこともじぶんでしらべられてすごいね。

など、おほめの言葉を書いていただいて、どの子もとてうれしうであった。こういう学習をくり返し、意欲をもって学習に取り組めるようにしていきたい。

(東近江市立湖東第一小学校)

言葉に触れる 機会を見つめ直す 全校で取り組み 書く活動から

海東 貴利

本校では、校内の掲示物や図書室のポップなどを通じて、児童が日常的に「言葉」に触れる機会が多く見られる。

ある日の休み時間、保健室の前で高学年の児童と低学年の児童が楽しそうにおしゃべりをしていました。気になって様子を見てみると、高学年の児童が、発育測定や検査に関するお知らせについて、低学年の児童にもわかるようにやさしく説明しているところだった。内容の難しい保健に関する言葉を、かみ砕いて、身近な言葉に置きかえながら話しており、低学年の児童も安心した様子でうなずいていた。

また、ある日のこと。図書室の「今月のおすすめの本」の棚の前に、何人かの児童が集まっていた。図書館ボランティアの方が書いてくださった本の紹介文に興味をもち、その言葉に引き寄せられるように本を手にとっていく児童の姿が見られた。

校内の教室や廊下には、児童が作成した作文やポスターがたくさん掲示されている。その前で、ほかの学年の児童が立ち止まり、熱心に読んでいる姿を見かけることがある。最近ではタブレット端末の活用が進み、手軽でデザイン性の高い掲示物も多くなってきたが、従来の手書きの文章をじっくりと読んでいる児童も少なくない。

このように、学校生活の中で、自然と掲示物に目を向け、読むことを習慣としている児童がいること、また、素通りせず言葉に触れようとする姿勢をもつ児童が意外と多いことに気付かされた。こうした日常の中の「読むこと」「書くこと」に改めて目を向けることで、児童が言葉に親しむ機会をさらに広げることができるのである。書かないかと感じている。そして、書くことの楽しさや意義を、全校で共有していかれたらと考えている。

「書く活動の意味づけ」
手意識した発信の場の設定
本校では、子どもたちが「自分の書いた文章が誰かに読まれ、反応を得る」という経験を通して、書くことの楽しさや目的を実感できるように、様々な工夫を行っている。

■「書きましよう月間」
その一環として、6月を「作文学習強化月間」と位置づけ、全校で「書くこと」に取り組む特別な活動を行った。この取組では、全校共通で「書いてみたくなるテーマ」を設定し、各学年の発達段階に応じて題材集めや段落構成などの指導を丁寧に行った上で、作文を書く活動へとつなげた。さらに、各学年で選ばれた優れた作文は校内に掲示し、選出された児童が校内放送を通じて発表する機会も設けた。

や目的意識も高まった。また、他の学年の作文を読むことを通して、学年を超えた学び合いも生まれている。

■「アピール文を書く」ノートコンテスト

本校では、児童が自主的に予習・復習に取り組む「自主学習ノート」の活動を推進している。子どもたちの主体的な学習態度を育てることを目的としており、その取り組みの一環として、定期的に「ノートコンテスト」を実施している。このコンテストでは、すべての児童が自分のノートの中で「もっとも頑張った」と思うページを選び、それを写真に撮ってエントリースする。加えて、そのページのどこを工夫したのか、どのように頑張ったのかなど、自分の取り組みを振り返りながらアピール文として用紙にまとめる活動を行っている。

この取り組みによって、児童は「自分の学びを振り返って言語化する力」を養うとともに、学習に対する自信と誇りを育んでいる。また、他の児童のノートを見て刺激を受け、自分の学習スタイルに生かそうとする意欲も高まっている。

「誰かに読んでもらおう」「伝えたい相手がいる」という体験が、書くことに意味を与え、主体的な表現へとつながっていく。日常の中にある小さな発信の場こそが、書く意欲と力を育む土壌となると考える。

(高島市立マキノ東小学校)

編集後記

▼6月例会
(五一九回)

徳信さん(高宮小) 研究教材は「言葉の意味が分かること」(5年・光村図書) 研究主題は「子ども達が自分事にして、自覚するための問い」(づくり) ▼提案の意図は次の通り(提案趣旨より引用)「国語科における説明文の学習内容に求められるのは内容の理解だけではない。文章の構造や筆者の意図まで理解できるように読めるようになることが目的である。そこで、読む力を育むために、文章の構造や筆者の意図を学ぶようになった。何をどう読むかを自分で自分の言葉の力で確かめるようにしたい」という意図が込められている。▼「教材文は、言葉の力をいかにして認知しているのか」という問いから、自分事として大事にするための「問い」として提案された。▼単元の展開は①問いの意図と文章の構造の理解②筆者の意図と文章の構造の理解③関係理解と文章の構造の理解④関係理解と文章の構造の理解⑤まとめと自分の学びの評価。主として①の問いにつながる質問づくり▼研究協議では話題になつたのは、「質問づくり」について。授業における子供の課題意識は、「何に注意をして文章を読めばいいか」ということであり、主に張の「何に注意をして文章を読めばいいか」ということを大事にした。この意味づけである。具体例として、最初の二時間目の指導の仕方、教材「見立てる」の活用について考え合った。増田史先生の玉稿を頂きまして。感謝。

(吉永幸司)